字音下降拍はどのように実現したと考えるか
―金田一春彦『日本四声古義』での音調推定をめぐって―

加藤　大鶴

1　はじめに

金田一春彦「日本四声古義」は 1951 年に寺川喜四男他編『国語アクセント論叢』（法政大学出版局）に収められたものが初出である。本書はアクセント研究が活発だった一時代を反映して、その「前篇である」（安藤正次による「発刊のことば」から）『日本語のアクセント』（日本方言学会編『日本語のアクセント』中央公論社,1942）と対をなすアクセント研究の集大成であったと見られる。冒頭の一編には安藤正次「三十余年の昔」が、末尾の一編には稲垣正幸「国語アクセントの研究概観―附、国語アクセント研究文献目録」（目録は明治時代から昭和 20 年までを網羅したもの）が配置されることからも、本書が研究史上のマイルストーンを意図しただろうことが窺われる。

稲垣による研究史の概観は七章からなるが、そのうちの第四章では「国語アクセントの歴史的研究」に紙面を割いている。井上奥本 1928「日本語調学小史」（音声の研究 2）、服部四郎 1942「補忘記の研究―江戸時代書記の近畿アクセント資料として―」（『日本語のアクセント』）、金田一春彦 1943「国語アクセントの史的研究」（日本方言学会編『国語アクセントの話』春陽堂書店）他によってアクセントの歴史的研究の基礎が整う中、依然として文献資料（に現れる記号類）から「音価[*1]」を明らかにする必要性のあることが述べられている。声点や節博士などの記号類が字音四声に対する観察から生まれたものであることから、古代四声の「音価」を推定するにあたって字音四声と和語アクセントに対する観察が補い合うように利用されたことが、稲垣の記述からも読み取れる[*2]。「国語のアクセントを真に科学的に研究する」（:91）[*3]ことを標榜しながらも、古代の字音四声の音調を推定したことの評価が大きいように思われる金田一春彦 1951「日本四声古義」（以下、「古義」）では、これに先立って書かれた古代の和語の音調を推定した金田一春彦 1944「類聚名義抄和訓に施されたる声符に就て」と同じく、字音四声と和語アクセントに対する観察によりながら、比較言語学的手法、

---

*1 金田一が使う「音価」という術語を本稿では『日本四声古義』の内容を紹介する際にそのまま用いるが、稿者が地の文で実音調について触れる際には調値という術語を用いる。

*2 「字音の四声の音価については、井上奥本氏が「語調原理序論［二四・大五］、ついで「日本語調学小史」［二九・昭三］において、その音価の闡明に努力されたが、ついに成功されなかった。後に、金田一春彦氏が、前記［九八・昭十二］その他の論文でこの問題を取り扱われたが、最も詳しいものは「類聚名義抄の和訓に施された声符について」［一一五・昭十九］に見えるもので、同氏によると、平声は低平調（又は特に下降調）、上声は高平調、去声は上昇調を表わすというのであるが、これが今日の定説となっている。（下略）」（:754）

*3 本稿では金田一春彦 2005b のページ番号に従う。

内的再構の手法に基づいて「音価」の推定を行っている。

さて、「古義」は 76 ページにも及ぶ大部の論文である。その構成は次に示すとおりである。

一　はしがき　考察の目的
二　考察の範囲と方法
三　中国語の四声の音価の考察
四　現在の国語諸方言に伝へられてゐる字音語のアクセント
五　仏家に伝へられてゐる四声の音価の考察
六　古代文献にアクセントの註記されてゐる語の現在諸方言に於ける音価の考察
七　古代の諸文献に見える四声の音価に関する記述の考察
八　むすび　考察の収穫

「古義」の結論として得られた、調類と調値は次のとおりである。この結論は現在もほぼ定説として受け入れられており、古代字音の音調を論じる上での基本となっている（奥村三雄 1974・小松英雄 1971:16-24・沼本克明 1982:956-958・佐々木勇 2009:520-522 ほか）。

- 平声（平声重）…低平調
- 平声軽…下降調
- 上声…高平調
- 去声…上昇調
- 入声（入声重）…低平調の入破音
- 入声軽…高平調の入破音

ところで、古代の「国語アクセント」の究明が「古義」の目的であることは言うを俟たないが、そのプロセスで古代字音の実音調を取扱うために、その都度示される「音価」が日本語アクセント体系から見た姿であるのか中国語側から見た姿であるのかが十分に明示されていない部分がある。三章は間違いなく中国語側での姿を論じており、四章は日本語側での姿を論じていることは明らかである。しかし五章や七章は中国語を受容した者がその音調をどう聞きなしたか、あるいは伝承したかということが問題となるので、得られた結論の位置づけには解釈が生ずるだろう。外国語に接した日本語母語話者が聞きなした音から、外国語自体をどう再現していくかについては様々に困難が伴う。

すでに様々に指摘されるように、日本語で読まれる文献に声点を差すという行為自体も、中国語の調類・調値を示すために用いられたツールを転用しているという点で、本質的には同じ困難を根底に抱えていると考えられる。こうした困難について、例え

ば小松英雄 1957=1981 は、字音の発音は典型的に 2 音節で実現されることで音節間の相対的な高低差が把握されやすかったのに対し、日本語の個々の音節の高低に「準用」したところに困難があるとして、「国語と漢語の声調は、畢寛異質的なものであるから、同一の規矩をもってしては律しえない」としている[*4]。また外国語として受け止めた音調がすでに日本語のフィルタを通っているということについて、沼本克明 1982 でも、漢音の声調は日本漢音であることを前提としたものであって、「中国音韻と結びつけて考えるとするならば、わが日本漢音の祖系音（としての唐代長安音）の声調調値がほぼそうであったと言うことはできる」もののそこに限界がある旨を述べている[*5]。

上に示した定説となっている調値のうち、とりわけ下降調の発端高度は「古義」中でも複数の案が示されながら、それをひとつに定めていく具体的なプロセスは必ずしも丁寧に論述されていないように見受けられる。それは金田一が結論として掲げる調値推定の論拠の大部分が、日本語として実現されたアクセントというフィルタを通して得られていることによると考えられる。金田一以後、字音研究や中国語音韻史研究の領域から下降調実現については異なる提案が様々になされている。本稿では、調値推定のプロセスをできうる限り丁寧に追いかけ、それらの研究を参照しながら、金田一の推定した調値を再検討することを試みたい。

2　『日本四声古義』の再検討

以下、金田一の論述の流れに従って、その意図を理解しながら解説を進める。なお引用頁は金田一春彦 2005b に拠った。

2.1　「一　はしがき　考察の目的」

金田一は古代における四声の「音価」を明らかにする上で、次の 5 つの問題があるという。

---

*4 「いわゆる monosyllabism を基調とする中国原音において、声調のもつ機能は甚だ重要であるし、それが原音から脱化して「仮名で再現しうる形」・ないしそれに近い形にまで変って以後は、声母及び韻母の簡略化にともなう同音異義語の飛躍的増加の代償作用として、その機能が一層増大するわけであるから、学習者は声調の習得に多大の注意を払い、その延長として、和訓にもまたその識別を行おうとしたことは、自然な過程として考えうるところである。しかし、国語と漢語の声調は、畢寛異質的なものであるから、同一の規矩をもってしては律しえないのである。すなわち字音の大部分は、二音節ないし二音節的に発音されたため、音節の相対的な高低関係の把握が比較的容易だったのであるが、それを国語の個々の音節の高低に準用しようとしたところに、困難の原因があったのである。」（小松英雄 1971:550-551）

*5 沼本は日本漢音の声調調値の具体相を示した上で、「右に紹介したところは、日本漢音を前提としたものであって、中国語音韻史とは一応切り離して考えねばならないということである。既に言及したところであるが、中国音韻における声調調値は、時代や方言によって様々である。右に紹介したところを中国音韻と結びつけて考えるとするならば、わが日本漢音の祖系音（としての唐代長安音）の声調調値がほぼそうであったと言うことはできるがそれ以上の方言には敷衍は不可能ということである。」（沼本克明 1982:958）としている。

(1) 具体的音価に言及する文献が少ないこと

「四声を以て国語のアクセントを説いたもの」「字音語に就いてその語の四声を示したり、単なる四声といふ現象に言及したりした文献は相当の数に騰る」が、「その具体的な音価（例へば平声は平らな曲節を有つ声調であるとか、さうでないとか）に就いて記述した文献は甚だ少ない」（:92）ということを金田一は第一の問題に掲げている。そもそも四声についての音声学的な観察が信頼できるかどうかという問題もあり、複数の記述を比較しながら音声的実体に迫ることが望ましいとするがが、その記述自体が少ないことに大きな問題があるとしている。

(2) 漢学者の理解が役に立たないこと

金田一は本書の随所で「現在漢学者の間に勢力ある四声の音価に関する解説」（:92-93）を批判をしている。「漢学者の理解」とは、「平声＝平らな声調、上声＝低から高へ昇る声調、去声＝高から低へ降る声調、入声＝ｐ・ｔ・ｋの入破音で終るもの」であり、その例として塩谷温『作詩便覧』、山田孝雄『古事記概説』（中央公論社,1940）*6を掲げている。その上で、漢学者と契沖が理解する四声と音調の関係に矛盾があることを指摘しており、これを整合的に説明するには「京阪語は元禄期―現代の間に目まぐるしいアクセントの変化をしたと考へなければならず（中略）相当無理である」と結論づけている（詳細は次項）。

(3) 四声の音価の説明が多岐にわたること

下表の通り、契沖『和字正濫抄』*7、文雄『和字大観抄』*8・『韻学階梯』、伊勢貞丈『安齋随筆』の説明に矛盾のあることを示している。

なお金田一は伊勢貞丈の音調把握について「伊勢貞丈は『安齋随筆』に於いて契沖一派の平声としてゐるものを上声とし、契沖派の去声としてゐるものを上声としてゐる」（:93）としているが、これは「契沖一派の平声としているものを去声」の誤りであろう*9。

---

*6 「一番初めの時期に、成りませる神の御名は宇比地邇（上）神、次に須比智邇（去）神、此處に上の字と去の字が書いてあります。此の邇と云ふ所で此の宇比地邇神の時には此処で聲を上げるのでありませう。去は尻下りの發音を意味します。此の上と去は支那の發音の術語でありまして、尻上りの聲が上尻下りの聲が去なんであります」（:18）とする。

*7 「平聲は聲の本末あからすさからす一文字のことくして長し。上聲は短くしてすくにのほる。去聲はなまるやうに聲をまはす。入聲は下にふつくちきの音ありて切直なり。（中略）和語にも平上去の三聲あり一字假名にていはゝ、日〈平〉ひ　樋〈上〉ひ　火〈去〉ひ。毛〈平〉け　蹙〈上〉け　食〈去〉け　二字假名　橋〈平〉はし　端〈上〉はし　箸〈去〉はし。弦〈平〉つる　釣〈上〉つる　鶴〈去〉つる（下略）」（『和字正濫鈔』巻 5・46 ウ-48 オ）

*8 「仮名遣大概（カナツカヒタイガイ）の書にいへるごとく。橋（ハシ）平　端（上）　箸（去）を。平上去といへるなれど。もろこしの四聲には。端（ハシ）平　橋（ハシ）上　箸（ハシ）去の次第なり。」（『和字大観抄』巻下 18 オ）

*9 伊勢貞丈は『安齋随筆』巻 28「早歌」の項目で四声に言及し、平声を「シリコヱ長クヒク音タヒラカナリ」、上声を「シリコヱ上ル」、去声を「シリコヱ下ル」、入声を「シリコヱツマル」とする。巻 20 においても同様の音調認識を示した上で、和語四声を次のように示す。「和語四聲は五畿内の人の

	現代京阪語	契沖	文雄	伊勢貞丈
樋・端	全平型	上声	平声	平声
火・箸	上昇型	去声	去声	上声
日・橋	下降型	平声	上声	上声*（去声のことか）

表１　契沖・文雄・伊勢貞丈の四声理解

(4) 古代の四声が複雑であること

ここでは四声の軽重について言及されている。文雄『和字大観抄』では平上去入の四声だけであるのが、観応『補忘記』では平入に軽重があり（六声）、『和名類聚抄』では上去にも軽重があり（八声）、甚だしいものとして『法華経音義』*10には軽重の下位区分にさらに平上去入する点図（十六声）や*11、十二声を区別するものもあるという*12。

(5) 伝来した四声には色々の種類があったこと

まず安然『悉曇蔵』に記される、日本に伝来した新旧 2 種の四声を取り上げ、伝来字音の源流が一つではない可能性を示唆する。また仏教関係の文献に頻繁に現れる「漢音と呉音とでは平声と上声去声とが相反する」という記述も、問題を複雑にしているとする。

2.2　「二　考察の範囲と方法」

金田一は一章で述べた 5 つの問題を解決するために、それぞれ次のように方法論を定める。

詞に月をツキと云ふは去聲なり　キの音下りて弱し　関東の人の詞には上聲なり　キの音上りて強し　畿内の人花をハナと云ふは去聲なり　ナの音下りて弱し　関東の人の詞には上聲なり　ナの音上りて強し　畿内の人の鼻をハナと云ふは上聲なり　ナの音上りて強し　関東の詞には去聲なり　ナの音下りて弱し（下略）」（伊勢貞丈『安齋随筆』巻 20「音の四聲」の項目）

*10 『法華経音義』明覚三蔵流本では、点図を掲げ次のような説明を加えている；「平声重＝平声始終サケテヨム　平声軽＝平声ノ軽ハ初終ヲ上ケテヨム　上声＝上声ハ初ヲアケ終ヲサケ　上声去声任心読之　去声＝初ヲサケ終ヲアケテヨム　入声ノ軽他カナヲスルヲ以テ入声トハ知ヘシ文字ノ終フツクチキアリ　入声重＝入声ヲ平声ニヨム」（25 オ）。ただし「上声去声任心読之」はいわゆる毘富羅声であって他とは性格を異にする。

*11 沼本克明 1986:144-145 では『佛母大孔雀明王経』平安初期末点を取り上げ、「平上去入各声に有声無声の違いによって軽重を区分し、更にその軽重の各々に有気無気の違いによって軽重を下位区分した十六声体系であったと解釈される（中略）但し、この十六声体系はこのままの形で実際の読誦が行われていたというものではないであろう。「広韻」との比較において殆ど例外が無い所から考えて、恐らく「切韻」の様な韻書の反切を参照しつつ、長安音の知識を有する何人かによって、改めて規範的に学習された結果を反映したものと解すべきであろう」としている。

*12 金田一がここに掲げる「普通の平上去入の他に、「重」の平上去入、「軽」の平上去入を区別して示す四声点図」（:94）が具体的に何であるかここでは言明されないが、小西甚一 1948:504 には十二声の点図が示されている。

(1) 古代文献のみに頼るのを避ける

古代文献にのみ頼らず、以下に示す 3 種類のデータを基にして「古代の四声の音価を推定し、その結果を、古代の文献の記述を通して推定される結果と対照して、果してその推定が正しいかどうかを批判するといふ行き方」（:95-96）を選択する、とする。

1. 現代語に伝わる字音語のアクセント
2. 現在の仏家に伝わる字音読誦の曲節
3. 過去の文献に声調が記載される語彙の現代諸方言におけるアクセント

(2) 現代漢学者の四声の解釈は取らない

金田一は、井上奥本の四声解釈を乗り越える形[*13]で、「現代漢学者式の四声解釈は、近世中期に、古い伝統とは別個に新たに発生し、近世後期以後急激に勢力を有ち初めて現在に至つたもの」（:96）とする。その理由として「一つには、近世初期以前の文献で現代漢学者式の四声解釈によつて初めてアクセントの記述が説明出来る文献と言ふものは絶無」であり「二つには、近世初期以前の文献で漢学者式の四声の内容を説いてゐるとみられる文献も此また絶無だからである」としている。

(3) 契沖の四声理解＝伝統的とする

文雄は当時の中国杭州音の影響によって四声を理解し、伊勢貞丈は近世中期以後に発生した漢学者流と同様に四声を理解しているとして、それぞれ古代の四声を考える上では参考に値しないとする。

(4) 軽重の概念について

金田一は「古代国語のアクセントの記述を考へる資料としての四声の音価の考察と言ふことに限るならば、（中略）結局、平声の軽重と、上声一般、去声一般とが明らかに成れば十分である」（:97）[*14]としている。また軽重については先行する研究、諸資料の検討結果から、「『軽』とは、同種類の声調の中、より高く初まる声調、『重』とは、より低く初まる声調の称である、と見てよいやうである」とする。

(5)『悉曇蔵』に見える各派の四声観から一つを取ればいい

金田一は、字音四声の導入時期に複数の種類があったとしても、「平安朝中期以後、近世初期に至る文献」との整合性を見れば、一つに定められるとしている。

[*13] 金田一は井上奥本がそのように四声を解釈したことについて、「現代の漢学者が、古代の儒家の流れを汲み、古代の儒家は漢音を重んじた事実」（:96）によって漢学者の四声解釈＝漢音の四声と捉えたのではないかとした。同様の指摘はすでに金田一春彦 1944 でもなされている。

[*14] 中国音韻学では音節の頭子音に応じて全清音・次清音・次濁音・全濁音を分ける。これらのうち前 2 者または 3 者を指して「軽」、後 2 者または 1 者を指して「重」と呼ぶ。軽重という術語は日本漢字音についてよく用いられるが、中国語学では陰陽という術語を用いることが多い。軽重と陰陽の概念がともに中国語音韻学の清濁から派生する区分であることは朝山信弥 1941・有坂秀世 1936 に詳しい。

2.3　「三　中国語の四声の音価の考察」

本章では、古代中国での四声に関する観察に基づき、その音調を推定しようとする。

(1) 四声という術語について

金田一は「四声」という術語が南北朝の斉の永明年間（483-493）に、沈約（441-513）・周顒等によって用いられたという説を紹介している[*15]。ここで金田一は平上去入の字義から「平＝平らな音」「上＝高く上る音」などのようにして、安易な連想にもとづいて音調実体を推定することを慎むべきであるとしている。また仮にそのように推定されたとしても、沈約の時代の音調から、時代も地域も異なる漢音の母体音となった長安音や呉音の母体音となった江南音を推定できるはずもないとしている。

(2) 四声の音価に関する記載

金田一は『元和韻譜』（806-820 成立）「平声ハ哀ニシテ安シ　上声ハ厲シクシテ挙ル　去声ハ清クシテ遠シ　入声ハ直クシテ促ル」[*16]という記述と、『康熙字典』に引かれる「平声ハ平ラニ道ヒテ低昂ナシ　上声ハ高ク呼ビテ猛烈ニ強シ　去声ハ分明哀遠ニ道フ　入声ハ短ク促リ急ニ収蔵ス」[*17]という記述とを紹介するが、これらは表現の巧拙はあるにしても音調を推定する上では「余り重要な働きをなすとは考へられない」（:102）とする。

(3) 現代中国語の諸方言

金田一はカールグレン『中国音韻学研究』、劉復『四声実験録』、趙元任『現代呉語的研究』[*18]に記載される諸方言の音調を紹介するが、「声調の音価が余りにも千差万別の様相をもってゐる」（:102）ために、比較言語学的手法を適用させにくいという趣旨のことを述べている[*19]。

---

*15 「又撰四声譜、以為在昔詞人、累千載而寤、而独得胸衿、窮其妙旨、自謂入神之作、高祖雅不好焉。帝問周捨曰「何謂四声？」捨曰「天子聖哲」是也、然帝竟不遵用。」（唐　姚思廉撰　梁書第一冊巻第一至一六（紀伝）, 中華書局出版,1973:243）。四声とは何か？と武帝に問われた周捨が答えた「天子聖哲」とは、その一字ずつが平上去入に対応していることに妙があったのだが、武帝はそれを理解しなかったという。これは当時の中国でも四声という考え方がまだ受け入れられにくかったことを示しているとのことである（頼惟勤・水谷誠 1996:206）。

*16 文雄『磨光韻鏡』巻下 8 オに「元和韻譜云平聲者哀而安　上聲者厲而舉　去聲者清而遠　入聲者直而促」と引用される。

*17 文雄『磨光韻鏡』にも「康熙字典云平声平道莫低昂　上声高呼猛烈強去声分明哀遠　入声短促急収蔵」（巻下 8 ウ）とある。

*18 B. カールグレン著, 趙元任, 羅常培, 李方桂合譯 1940『中国音韻学研究』（商務印書館,Karlgren, Bernhard,”Etudes sur la phonologie chinoise”,（Archives d’é tudes orientales, v. 15）Elanders Boktryckeri Aktiebolag, 1926）、劉復 1924『四声実験録』羣益書社、趙元任 1928『現代呉語的研究』（清華學校研究院叢書, 第 4 種）清華學校研究院

*19 平山久雄 2000:122 では、金田一によるこの趣旨を受け、各種方言調査の蓄積から「比較言語学的方法を適用して過去の調値を再構成することが或程度可能になってきた」として、「官話祖調値」（平山久雄 1984）を提案している。これは華北華中平原を中心とする官話方言の比較を通じて推定したもので、「陰平*42　陽平*11　上声*’435　陰去*35　陽去*24（上声の’は調値全体が口頭緊張を伴

ただ、有坂秀世 1936 に述べられる中国北京官話の成立に触れ、「音韻変化の現象に就いての音声学的な解釈も一役買ひ得る筈である」として、いわゆる陰陽調分裂の事例を紹介している。これは「古代北方中国語」の上声のうち全濁だけが去声に合流したというもので、「元来全濁（カルルグレンに従へば、古代中国語においては有気有声音と推定されてゐる[*20]）を頭音とする音節は、音声学的に見て、他の音を頭音とするものよりも、初まりが低く発音される可能性をもってゐる」（:103）と説明される[*21]。このことを手がかりに、去声は上声に比べてその発端高度が低いと考え、もし上声が高平調ならば去声は上昇調であったことが想像されるとしている。

平声	平調。殊に低平調？
上声	高い声調。高平調か。
去声	変化のある声調。上昇調か。
入声	入破音

表 2　［結論第一］

以上の検討を踏まえた結論が表 2 に示す音調の推定である。

2.4　「四　現在の国語諸方言に伝へられてゐる字音語のアクセント」

本章では現代の諸方言における字音語のアクセントが、古代の字音語、ひいては「元の中国語の四声」が継承されたものであるという前提のもとで、その対応について論証を行っている。

金田一は外国語が借用される際に音の特徴も継承されることの一例として、一部の外来語が現代標準語で頭高型で発音されるのは原音の影響であることを挙げ[*22]平安期の字音語の発音も原音の影響を受けていただろうとする。

(1) 古代の文献間に見られる対応

『類聚名義抄』（観智院本）には「起　音豈〈上〉…禾キ〈平〉（仏上巻 33 ウ）」（:106）のように、「和音」[*23]を声点とともに注記する例がある。この和音の声点と、韻書の四声、『法華経音義』その他の仏書の三者を比較すると、和音〈平〉: 韻書上声または去

うとのこと、*は再建された推定音であることを示す）」とするものである。

*20 カールグレンは全清音＝無気無声音　次清音＝有気無声音　次濁音＝鼻音　全濁音＝有気有声音とする。平山久雄 1967 では全濁音を無気有声音とする。

*21 なお切韻系韻書に代表される中古音から唐末長安音への変化は慧琳『一切経音義』（787-807 撰述, 慧琳音義とも呼ばれる）の反切によく現れている（黄淬伯 1931）。この資料から推定される唐末長安音は、日本漢音の中心的な母体音であることが知られる（沼本克明 1982:892 など）

*22 金田一は 5 拍の外来語に頭高型が現れることを取り上げ、その型に外来語が偏っていることを示唆している。秋永一枝 1958「アクセント習得法則」の「9. 外来語の単純名詞」では「新しく入った語、十分日本語化していない語」に原音の影響を見ており、馴染みのある語のなかには日本語らしいアクセント型に変わるものがあることを指摘している。しかし字音語のアクセントについては、日常的に使われる語ほど原音声調との関係があり、耳慣れない（十分日本語化していない語）ほど特定のアクセント型に収斂する傾向があることも指摘される（奥村三雄 1974・蒲原淑子 1989）。

*23 「和音」「正音」とは日本における「呉音」「漢音」をそれぞれ指す（馬渕和夫 1962:343 他）。

声：仏書平声という対応（金田一は甲類と呼ぶ）と、和音〈去〉：韻書平声：仏書上声または去声（金田一は乙類と呼ぶ）という 2 種類の対応関係が看取されるとする。

(2) 現代京都の漢語アクセントと甲乙類の対応

金田一はこの甲乙の対応をもって「当時我が国に伝はってゐて一般に用ゐられてゐる漢字音のアクセントに二種類の型が」（:108）あり、それが当時新しく伝来した中国語（韻書）に対応しているのだから、原音声調の影響が日本語のなかに現れるという考え方には妥当性があるとして、この対応が現代京都方言に残る「日常頻繁に用ゐられ続けて来た」字音語にも見られるのではないかという考え方に逢着する。

金田一が掲げる 4 拍漢語の例を表 3 にまとめた（原音声調欄は加藤が記載）。甲類には他に「山（サン）、金（キン）、天（テン）、水（スイ）、前（ゼン）、小（セウ）」、乙類には他に「三（サン）、近（キン）、今（コン）、来（ライ）、論（ロン）、同（ドウ）、類（ルイ）」が挙げられている[*24]。

	現代京都ア	具体例	原音声調
甲類を先部要素	●●●●	神（シン）—	漢音・陽平
	●○○○	人（ジン）—	
乙類を先部要素	○○○●	新（シン）—	呉音・去声
	○●○○	人（ニン）—	

表 3　現代京都アクセントと甲乙の対応

以上の対応から現代京都の漢語アクセントには原音声調の影響があるとする[*25]。

(3) 現代京都の漢語アクセントと『補忘記』

金田一はこうした「対応」を、現代京都漢語アクセント：『補忘記』漢語節博士：『補忘記』漢語声点の間についても検証する（金田一が掲げる語彙一覧を表 4 にまとめた）[*26]。なお一覧には『補忘記』の漢語声点で上平型が掲げられていない。

---

*24 これらはほぼ甲類＝漢音陽平声、乙類＝呉音去声を由来に持つものとして見て良いと思われる。ただし音形と音調がともに同じ字音系統に属さない例もあることに注意が必要である（加藤大鶴 2016）。例えばここに甲類となる「前（ゼン）」は韻書陽平声セン・呉音去声ゼンである。金田一の対応で見る限り、古代の四声は平声（韻書が示す四声に同じ）でなければならないが音形は呉音である。こうしたねじれは乙類の「近（キン）」（韻書去声キン・呉音平声コン）についても言える。

*25 ただしこの表に示した見立ては金田一のいう甲乙類の対応をなしていない。表 3 に示すように、高く始まる型は第一字が漢音系字音でかつ陽平声（低平調）に対応し、低く始まる型は呉音系字音でかつ去声（上昇調）に対応している。金田一がいう甲乙 2 類で対応させるためには、「甲類を先部要素」の例に呉音系字音で平声、韻書で上去声を挙げるべきであった。幸いにも結果だけ見れば、古代字音で平声だったものと去声だったものとの対応はなしており、論述の意図は達成されている。

*26 近世の漢語アクセントと現代京都アクセントに対応が認められることはおおむね首肯し得るが、実際にはここまで整然とはしていないようである。上野和昭 2011:266 では近世に HHH 型や HHL 型であったものに、現代京都アクセントでは HLL 型と LHH 型に変化してしまっているものが多数見られるという。

現代京都ア	補・節博士	補・声点	語例
●●●	徴々	上上・上フ入	「威勢」「都合」
●○○（1+2）	徴角	上入	「功徳」
●○○（2+1）	[徴角] 角	平軽上・平上	「天下」「証拠」
●●○○	徴角	平去・入去	「発心」「一心」
○○○●	角徴々	去上	「観音」
○●○○	[角徴] 角	去平	「了簡」

表 4　現代京都の漢語アクセントと『補忘記』の対応

(4) 現代京都の漢語アクセントと呉音四声の対応

以上の予備的考察を経て、金田一は現代京都の漢語アクセントと呉音四声の間に対応関係が認められるものについて、次のリストを掲げる[*27]。

① 漢字 1 字 1 拍語

平声　LH 型が多い。HH 型であらわれるものは京都 1 拍語の「基本アクセント」　例）苦（クー）

② 漢字 1 字 2 拍語

入声　HL 型が多く稀に HH 型もある。HL 型は京都 2 拍語の「基本アクセント」だが LH 型に属すものは見られないので、多様な型が HL に収斂したのではなく伝統型が HL であると金田一は見る。　例）一（イチ）

③ 漢字 2 字 2 拍語

イ. 上上・去去　[*28] HH 型が多い　例）袈裟（ケサ）

ロ. 上平・平平　HL 型が多い　例）餓鬼（ガキ）、二度（ニド）

④ 漢字 2 字 1+2 拍語

イ. 上上・去上　HHH 型が多い。HHH 型は「基本アクセント」だがもう 1 つの「基本アクセント」である HLL 型が見られないことから、HHH 型を伝統型と金田一は見る（次のロも同様）。　例）威勢（イセイ）

[*27] 古代の字音四声と近現代の文献・方言アクセントを比較して対応を見る分析手法は奥村三雄 1974、蒲田淑子 1989、上野和昭 2011、加藤大鶴 2016 他にもあるが、いずれも対応の例外をどのように解釈するかに苦心するようである。金田一は基本的に例外を基本アクセントと見て処理をしている。ただどの型を基本アクセントと見るかは時代や文献によっても異なる可能性があり、それゆえに研究者によって違いがある（奥村・蒲田は H1 型を基本アクセントとする）。

[*28] 金田一は呉音の上声と去声をひとまず別の音調として取り扱っている。呉音はラングレベルで平声・去声・入声の 3 声体系だったが、去＋去の連接が後項を高平調に変化させたことを通じて、4 声体系を生じたとされる（奥村三雄 1961）。すなわち金田一が記す「上上」と「去去」は、現代語との対応で見ようとする限り、呉音四声としては区別する意味はない。

ロ. 上平・上入・平平・平去・平入　HLL 型が多い　例）不断（フダン）（上平）、五月（ゴガツ）（上入）、世界（セカイ）（平平）、世間（セケン）（平去）、地獄（ジゴク）（平入）

⑤ 漢字 2 字 2+1 拍語

イ. 平上・平平・入平　HLL 型が多い。HHH 型・HLL 型は基本アクセントとする（次のロ・ハも同様）。　例）証拠（ショーコ）（平上）、上手（ジョーズ）（平平）、覚悟（カクゴ）（入平）

ロ. 去上　LLH 型が多い　例）褒美（ホービ）（去上）

ハ. 去平　LHL 型が多い　例）今度（コンド）（去平）

⑥ 漢字 2 字 4 拍語

イ. 平平・平入・入平・入入　HHHL 型が多い。HHHH 型も多いがこれは基本アクセントであるとのこと。（次のロも同様）。　例）正面（ショーメン）（平平、正直（ショージキ）（平入）、日本（ニッポン）（入平）、一月（イチガツ）（入入）

ロ. 去上・去去　LLLH 型が多い　例）同情（ホービ）（去上）、人形（ニンギョー）（去去）

ハ. 去平・去入　LHLL 型が多い。LLLH 型も相当にあるが LHLL 型は珍しい型であるから伝統型と見るとの由。　例）三本（サンボン）（去平）、音楽（オンガク）（去平）

以上の検討から、金田一は四声の「音価」を表 5 のように結論付ける。上記⑤イで平上が HLL 型に対応することをもって上声を高平調とみなすについては、この HLL 型がアクセント変化を経てのものであると説明している（語頭隆起）。③イ④イで去声と上声とで同じ音価になっていると見られるについては金田一は「（去声は）上声と似た音価を有ってゐたらしい」（:117）と考えているが、呉音が 3 声体系であったことはこの時点ではまだ知られていない。⑤ロ⑥ロから去声が低平調であった可能性も一応検討されている。平声の音価推定は難しいとする（①からは上昇調、③ロ④ロからは低平調や高平調、④イでは下降調[*29]）が、上声が高平調である目算が高いことから平声を高平調と見る選択肢は消去され、⑤ハ⑥ハを重く見て低平調の可能性が高いとする。

平声	少くとも高平調にはあらず。低平調か。
上声	高平調か。
去声	上昇調？低平調？
入声	入破音で、声調は平声と同じ。

表 5　［結論第二］

[*29] これは (4) ロの間違いであろう。ここでは 3 拍漢語の『補忘記』平平・平去が現代京都アの HLL に対応することから、前項が F で実現しその急激な下降を活かした F ＋ HL → FLL → HLL、F ＋ LH → FLL → HLL のような変化を想定したか。しかしそうであれば上平では H ＋ HL → HHL となるはずで矛盾する。

2.5　「五　仏家に伝へられてゐる四声の音価の考察」

本章では『四座講式』の『涅槃講式』に記された字音四声点と節博士の関係を手がかりとして、音調を推定する。この章に記される詳細な内容は金田一春彦 1961 にまとめられており、その最新の批判的検討は上野和昭 2017 においてなされている。ここでは詳細に立ち入らず、その概略のみ示す。

金田一が岩原諦信に教えを受けた『四座講式』の旋律を整理し[*30]、字音四声と節博士の関係を通じてその音調を推定する（表 6 にまとめた）[*31]。

四声	節博士	推定される音調	備考
平声重	角	低い平ら	1 拍・2 拍字とも
平声軽	徵角	第 1 拍が高く、第 2 拍が低い	すべて 2 拍で唱える
上声（1 拍）	徵	高い平ら	
上声（2 拍）	徵	第 1 拍・第 2 拍とも高い平ら	
去声	角徵	第 1 拍が低く、第 2 拍が高い	すべて 2 拍で唱える
入声重・フ入声	角	低い平ら	すべて 2 拍で唱える
入声軽	徵	高い平ら	すべて 2 拍で唱える

表 6　『四座講式』の声点・節博士から推定される音調

2.6　「六　古代文献にアクセントの註記されてゐる語の現在諸方言に於ける音価の考察」

本章では、文献資料（観智院本類聚名義抄）に現れる声点付き和語と、現代諸方言（京都・高知・赤穂・高松・東京）を比較し、その対応から声点の示す音調を推定しようとする。その対応は次のとおりである（一項目に 3 例ずつあるが最初の項目を例に掲げた[*32]。以下、京＝京都、高＝高知、赤＝赤穂、松＝高松、東＝東京）。

---

*30 徵＝高い拍、角＝低い拍を唱える曲節という結論に至る前に、「徵のアタリ」（西洋音階のミミ・あるいはミミソ）「徵のカヽリ」（西洋音階のラミ・あるいはラミソ）等の成立を論じている。それによれば唱法の発達を経る以前は「徵のアタリ」「徵のカヽリ」は「徵」、「徵角」は「角」だったろうとし、平上去入の各四声は「徵」と「角」で説明できるとする。なお岩原師の旋法の詳細は金田一春彦 1964:105 に記載される。

*31 すでに注で触れたように呉音はラングレベルでは 3 声体系であった（奥村三雄 1961 他）。すなわち平声軽・入声軽も元は単字声調としては存在しなかった（沼本克明 1982:424-441）。これらは「連読上の声調変化」（沼本）によって生まれたという（本来低平調である入声字が音節末が高い上声字または去声字に後接した時に、順行同化を生じて高平調化し、それが入声軽と把握された、というような経緯を辿って）。金田一は『四座講式』における平声軽・入声軽は「例が少ない」とするが、後から生じた音調であることが関係していよう。

*32 なお金田一が示す「名義抄の出所」は『天理図書館善本叢書』による影印では 1 丁後にずれている（仏上は 2 丁）。また次の記載には声点がない；「目」仏中 32 オ、「巣」仏下本 60 ウ、「小豆」仏中 66 ウ。

1 拍語

イ.『名』上声点「子 (コー)」HH(京) : HH(高) : HH(赤) : HL(松) : L(東)

ロ.『名』平声点「木 (キー)」LH(京) : LH(高) : HH(赤) : LH(松) : H(東)

「名 (ナー)」HL(京) : ナ (ガ)HL(高) : HL(赤) : HL(松) : L(東)

ハ.『名』去声点「巣 (スー)」HH(京) : ス (ガ)HH(高) : HH(赤) : HL(松) : L(東)

「歯 (ハー)」LH(京) : HL(高) : ハ (ガ)HL(赤) : HL(松) : H(東)

2 拍語

イ.『名』上上「風 (カゼ)」HH(京) : HH(高) : HH(赤) : LH(松) : LH(東)

ロ.『名』上平「石 (イシ)」HL(京) : HL(高) : HL(赤) : HL(松) : LH(東)

ハ.『名』平上「笠 (カサ)」LH(京) : LH(高) : HH(赤) : LH(松) : HL(東)

「秋 (アキ)」LF(京) : LH(高) : LF(赤) : LF(松) : HL(東)

ニ.『名』平平「足 (アシ)」HL(京) : HL(高) : HL(赤) : LH(松) : LH(東)

ホ.『名』去平「無 (ナク)」HL(京) : HL(高) : HL(赤) : HL(松) : HL(東)

3 拍語

イ.『名』上上上「形 (カタチ)」HHH(京) : HHH(高) : HHH(赤) : LHH(松) : LHH(東)

ロ.『名』上上平「小豆 (アズキ)」HLL(京) : HHL(高) : HHL(赤) : LHH(松) : LHH(東)

ハ.『名』上平平「力 (チカラ)」HLL(京) : HLL(高) : HHL(赤) : LFL(松) : LHH(東)

ニ.『名』平上上「烏 (カラス)」LLH(京) : LHH(高) : HHH(赤) : LLH(松) : HLL(東)

ホ.『名』平上平「兜 (カブト)」LHL(京) : LHL(高) : HLL(赤) : LLF(松) : HLL(東)

ヘ.『名』平平上「命 (イノチ)」HLL(京) : HLL(高) : HLL(赤) : LHH(松) : HLL(東)

ト.『名』平平平「頭 (アタマ)」HLL(京) : HHL(高) : HHL(赤) : LHH(松) : LHH(東)

金田一は以上の対応を次のように解釈し、［結論第四］（表 7）を導く。

平声	低平調？時には下降調も？
上声	高平調？時には下降調も？
去声	上昇調？

表 7　［結論第四］

上＝高い拍に対応している。3 拍語への京都方言などは LLH ＞ HLL、ニは LHH ＞ LLH、2 拍語と 3 拍語イの高松方言などは HH ＞ LH、HHH ＞ LHH という変化を経たと説明する。2 拍語ハの「秋」LF の第 2 拍に上声点が差されるについては「高平の拍と下降の拍とを表記する可能性がある」（:136）とする[*33]。

平＝低い拍に対応している。2 拍語のニ、3 拍語のヘトの京都方言などは LL ＞ HL や LLH ＞ HLL などのような変化を経ていると説明する。3 拍語のニホの赤穂方言の

[*33] 小松英雄 1957 による平声軽点の発見後は、この声点は差声体系が六声体系下では平平軽で差されるべきものが、四声体系下であったために音調上の類似から上声点が差されたと解釈されている。

第 1 拍については LH ＞ HH、LHH ＞ HHH、LHL ＞ HHL の変化が生じたとする。2 拍語ニ、3 拍語ヘトの高松方言第 3 拍は、LL ＞（HH ＞）LH、LLH ＞（HHH ＞）LHH、LLL ＞（HHH ＞）LHH の変化が生じたとする。1 拍語ロ「名」が HL となることについて低平の拍と「下降的な曲節」（:139）とを表した可能性があるとする[*34]。

去＝上昇拍と見ている。例数が少ないことと諸方言間に対応が見られないことから、比較言語学的な推定は行われていない。しかし去声点が必ず第 1 拍に現れるという位置制限から、上昇調と見るべきとしている（去上という組み合わせでもし去声点が下降を表しているとすると、中低形を生み出してしまう）。

2.7　「七　古代の諸文献に見える四声の音価に関する記述の考察」

本章では「四声の音価に関する記述をもった文献」を分析し、その音調を推定しようとする。金田一は 10 種の文献を挙げるが、具体的な分析対象とするのはそのうち 3 種である。

(1) **六声家　安然『悉曇蔵』（880）明覚『悉曇要訣』（1101 以後）**

金田一はまず『悉曇蔵』の記述[*35]から、「当時日本に行はれてゐた四声には、表式・金式・正式・聡式[*36]といふ四種のものがあり（中略）古く伝へられた表式・金式は五声或いは六声を区別するに止まるが、新しく伝へられた正式・聡式は八声或いは九声を区別する複雑なものであったことが窺はれる」（:144）として[*37]、「具体的な音価に就いては、この記述だけでは一寸分りかねると言はざるを得ない」としながらも、『悉曇蔵』の当該部分の訓読文を後述の『悉曇要訣』の解釈と合わせれば、次のように示唆しているように見て取れる。すなわち、「表」が伝えた四声は、平声＝低平調（直チニ低ク）で声調分化あり（軽アリ重アリ）、上声＝高平調（直チニ昂リ）で声調分化の結果軽のみあり（軽アリ重ナシ）[*38]、去声＝音調は不明（稍ゝ引キ）で声調分化なし（軽ナク重ナシ）、入声＝音調は不明だが入破音か（径ニ止ミ）、のように。

---

*34 これも注 33 と同様に平声軽点の発見後は、差声体系が六声体系下では平声軽点で差されるべきものが、不確かな写しでは平声点で差されたものと見られている。

*35 我日本國元傳二音。表則平聲直低有輕有重。上聲直昂有輕無重。去聲稍引無輕無重。入聲徑止無内無外。平中怒聲與重無別。上中重音與去不分。金則聲勢低昂與表不殊。但以上聲之重稍似相合。平聲輕重始重終輕呼之爲異。脣舌之間亦有差升。承和之末正法師來。（中略）四聲之中各有輕重。平有輕重。輕亦輕重。輕之重者金怒聲也。上有輕重輕似相合金聲平輕。上輕始平終上呼之。重似金聲上重不突呼之。去有輕重重長輕短。入有輕重重低輕昂。元慶之初總法師來。（中略）熟知風音。四聲皆有輕重。著力平入輕重同正和上。上聲之輕似正和上上聲之重。上聲之重似正和上平輕之重。平輕之重金怒聲也。（下略）（『悉曇蔵』巻 5,『大正新脩大蔵経』による）

*36 それぞれ表＝袁晋卿、金＝金礼信、正＝惟正、聡＝智聡であるとされる。それぞれの人物についての詳細は平田眞一朗 2005 にまとめられている。

*37 この六声家は原文通り理解すれば入声に軽重を区別しない五声である。これについて沼本克明 1982:964-973 では古文尚書平安中期点の声調体系と一致するとしている。

*38 三章にてカールグレンを引いて上声のうち全濁音のみが去声に合流したとすでに述べているから、金田一はこの「重ナシ」について全濁音のみを指していることは明らかである。

このことを、続く『悉曇要訣』の記述[*39]と合わせ、平声重＝初め後ち共に低るゝ、平声軽＝初め昂り後ち低るゝ、上声＝初め後ち共に昂る、去声＝初め低れ後ち昂る、入声重＝初め後ち共に低るゝ、入声軽＝初め後ち共に昂ると整理し、「昂（アガ）ル」を「高い」、「低（タ）ルゝ」を「低い」と理解する。

(2) 八声家　信範『悉曇秘伝記』（1286）

金田一は「信範『悉曇秘伝記』は、飯田利行氏に従へば、「八声ノ事」として次のやうな記述を載せてゐる由である」（:147）とするが、実際は了尊『悉曇輪略図抄』（1287）に記載がある。この記述のうち、「偃」（「ふす」か）は「昂」や「低」を平らな音調（level tone）とするなら曲調（contour tone）がふさわしいと考え、また明覚『悉曇要訣』の「初平後去呼之。即是八聲家去聲也」という記述から、六声家の去声は八声の去声重であろうと解釈し、「偃」は上昇調を意味するのではないかと結論付ける。以上を踏まえて『悉曇輪略図抄』の記述[*40]を理解すると、平・上・去・入の軽重それぞれに該当する音調が考えられると金田一は述べる[*41]。

ただし、軽重の別がもたらす各音調の発端高度の差について、金田一は「この軽重における高低の差は、平声・上声における音尾の高低等に比べて遥かに小さかったのではあるまいか。さうでなければ、低平調と下降調といふやうな、可成り差のある音調に対して、一を平声の重とし、他を平声の軽とするといふやうに、一つの声に一括するのは不審だと言へるからである」（:148）と慎重に一言を付している。

(3) 四声家　心空『法華経音訓』（1386）

四声家の四声は「平上去入の孰れにも軽重を説かない」（:150）が、「タル」「アガル」を六声家、八声家と同様の用法と理解して音調を推定している[*42]。

(4) 五のまとめ

金田一は以上の記述から、諸家の音調を表 8 に示す形で推定し、「『開合名目抄』『補

---

*39　六聲家之去聲與八聲字之去聲不同。今云去聲音可是六聲家之去聲。實是八聲家之上聲重音也。何者初平後上之音六聲家爲去聲。八聲家爲上聲重音。（中略）[*ai][*au] 二字可初平後去呼之。即是八聲家去聲也。故雖同去聲輕重有異歟。初平後上之字及初平後去之字六聲家同爲去聲。（中略）寶月宗睿意用八聲故五句第四字皆云上聲重音 [*e][*o][*a@m] 三字亦云上聲歟。弘法家用六聲故此等字皆云去聲歟。（中略）重音者去聲上聲之輕重アリ。知人既少。今私案之。初昂後低爲平聲之輕。初後俱低爲平聲之重。初後俱昂爲入聲之輕。初後俱低爲入聲之重。當知重音者初低音也。初後俱昂名爲上聲。是六聲之家義也。初低終昂之音可爲上聲之重。（『悉曇要訣』巻 1,『大正新脩大蔵経』による。梵字は大蔵経テキストデータベースの表示 [*] で示した。）

*40　右先明四聲輕重者。私頌云。平聲重。初後俱低。平聲初昂後低。上聲重。初低後昂。上聲輕。初後俱昂。去聲重。初低後偃。去聲輕。初昂後偃。入聲重。初後俱低。入聲輕。初後俱昂。（下略）（『悉曇略図抄』巻 1,『大正新脩大蔵経』による）

*41　佐々木勇 2009:520-527 では、『蒙求』平安中期点に認められる八声体系について論じ、それらが「一般的なものではなかったであろう」としながらも、声調の区別によって成立したものであることを論証している。

*42　平声ハタル　上声ハアカル　去声ハハシメタレテノチニアカル　入声ハフツクチキニテトヽマル（下略）（『法華経音訓』, 筑波大学図書館蔵本による）

忘記』『和字正濫鈔』は大体六声家の四声を説き、『文字反』*43『韻鏡開奩』（自等庵宥朔,1627）『韻鏡問答抄』は大体四声家の四声を説いて居り、記述も大体『悉曇要訣』又は『法華経音訓』と似たり寄ったりだと言ひ得る」（:150）としている。

		四声家：法華経音義	六声家：悉曇要訣	八声家：悉曇秘伝記
平声	軽	低平調　LL	下降調　HL	低下降調　ML
	重		低平調　LL	低平調　LL
上声	軽	高平調　HH	高平調　HH*	高平調　HH
	重			上昇調　MH
去声	軽	上昇調　LH	上昇調　LH	初中平・後上昇調　MMH？
	重			初低平・後上昇調　LLH？
入声	軽		高平調　H[H]	高平調　H[H]
	重		低平調　L[L]	低平調　L[L]

表８　四声家・六声家・八声家の記述から推定される音調

さらに金田一は、以上の推定が「大体同じやうな内容であって、唯その差は精粗の差に過ぎないと言ふことである。この事実は、此等文献の記述が大体信頼出来ることを物語ってゐるかと考へられる」（:150-151）として、これらの異なりを統合し、表９のようにまとめている*44。

平声	軽	下降調	
	重	低平調	（普通の平声）
上声	軽	高平調	（普通の上声）
	重	一種の上昇調	
去声	軽	一種の上昇調	
	重	上昇調	（普通の去声）
入声	軽	高平調の入破拍	
	重	低平調の入破拍	（普通の入声）

表９　［結論第五の四］

*43 筑波大学蔵本によれば平声点の位置に「タヒラカナルコヘ」上声点の位置に「アカルコヘ」去声点の位置に「サルコヘ」入声点の位置に「イリテサカルコヘ」とある。点図は平入に軽重を分かつ。

*44 表８にまとめたところでは H、M、L の３段階が現れるが、例えば平声軽について、六声家での HL と八声家の ML をもって六声家が高降りととらえ八声家が低降りととらえた、というふうに理解するべきではないだろう。どちらも原音の下降を捉えたことは同じであるが、六声家の記述からは二段観、八声家の記述からは三段観が要請されたと考えるべきで、六声家の記述から推定される原音は HL でも ML でも構わない。ことは日本側の聞きなしにある。

2.8　「八　むすび　考察の収穫」とあとがき他

以上、金田一は三章から七章までの「相互に独立」した分析から得られた結論が、相互に大きな矛盾を含んでいないとして、「一　はじめに」に示したような調類と調値を示すに至る。

なお、「古義」には末尾に 2 つのあとがきがある。1 つは『日本四声古義』（論文の完成自体は 1944 年とのことが記される）のあとに刊行された小西甚一 1948『文鏡秘府論考』についての言及で、金田一が平声軽の調値を下降調とするのに小西が高平調、金田一が上声軽を高平調とするのに小西が一種の上昇調とすることについて、その違いだけを掲げている。これについては、小松が個人的に小西から受けた教示では、金田一説と小西説は「両説一致」（金田一説に同意）しているとのことが報告されている（小松英雄 1957）。もう 1 つのあとがき（「あとがき・ふたたび」）では「古義」の成果が、「中国語学研究会」で 1949 年に報告されたこと、および『中国語学』31 号に掲載されたことが記されるほか、頼惟勤による天台声明を用いての音価推定が紹介される。

以上が「古義」そのものについてのレビューであるが、「古義」に直接的に関わるいくつかのことについて触れておく。まず、その後「古義」で最大の難所となっていた、平声点が下降調をも表していると推定されることは、小松英雄 1957 による平声軽点の発見によって解決を見たが、これを踏まえて金田一春彦 1960 では自身の説を再整理し学史のなかに跡づけようとしている。それから時代はくだるが、北京大学で記した金田一春彦 1980 とその中国語訳、同 1983 がある。この論文では『日本四声古義』を概略し、中国唐代の四声音調を講義風に説明しながら、それが現代北京語の声調にどのようにつながるかを推定したものであるが、その末尾で平仄の問題について触れている。金田一の推定調値によれば平声は軽重とも音節末尾の音調が低く、上去声は高い。すなわち中国唐代では、平仄は音節末尾の音調の高低によって峻別されていたというわけである[*45]。

3　『日本四声古義』の再検討

3.1　日本語アクセントで中国声調を写し取ること

冒頭で、日本語のアクセントと中国語の声調は異質なものであるから音調推定には慎重になるべきこと（小松英雄 1957）、典型的には六声を分かつ「日本漢音」の声調調値は中国語音韻史とは切り離して考えるべきこと（沼本克明 1982）を述べた。金田一は主として現代日本（当時）の方言アクセントと歴史資料に記される四声との対応を明らかにすることによって、古代日本における四声の音調を明らかにする手法を取っ

[*45] 頼惟勤・水谷誠 1996:207-209 でも、末尾が低い平声のグループと末尾が高い上去声のグループを持つ広東語声調を挙げ、これが平仄が主張されたころの原型に近いのかもしれない、としている。

たのであって、中国語原音における四声の音調を直接的には推定したわけではなかった。その古代日本における四声とはすでに日本語アクセント体系の高低認識のもとで写し取られたものであるから、原音声調に存在していた弁別的特徴はもちろん捨象されている。となれば、問題はそこで何が写し取られ、何が捨象されたのかということになるだろう。

金田一の考え方によれば、日本語アクセントの最小構成要素は古代も低い調素と高い調素であるから、2 つの高さの段階さえあればあとは調型が段位声調（level tone）的であれば低いか高いか、曲節声調（contour tone）であれば上昇するか下降するかで低平・高平・上昇・下降の 4 つの音調を記述することができる。ところが『悉曇蔵』で触れられるような、声調分化を経て弁別的な声調数がこの 4 つより多い体系の場合は、2 段階では写し取り切ることはできない。もし中国語における平声軽の発端高度が日本語の高平調の高さよりも低ければ（金田一自身が『悉曇蔵』の「表」から平声軽を低い下降調と推定する）、中国語の弁別的な声調体系の調値を推定するには 3 段階以上（31 の下降と 21 の下降が分けられるような）を必要とすることになる。そのような中国語声調を日本語アクセントで写し取るとしたら、21 の下降をその「下降する」調型を重視して写し取るか、全体としての低さを低平に寄せて写し取るかの 2 択しかない（そうして写し取られた下降を上声点、平声軽点、平声点のいずれで記載するかは、書記の問題である）。

3.2　金田一春彦 1951 における下降調推定の根拠

金田一が字音平声軽について触れているのは、『四座講式』に現れる軽点（「五　仏家に伝へられてゐる四声の音価の考察」）と、『悉曇蔵』等の記述の 2 箇所である。『四座講式』の軽点は日本での読誦の際に連音上現れたものと見るべきことは既に述べたとおりで、中国語原音に存していた下降を論じる根拠にはならない。また字音平声軽を論じるためには漢音資料を扱わねばならないがここではそもそも呉音による読誦音が分析の対象となっている。とすれば、根拠を持って金田一が論じているのは『悉曇蔵』等の記述のみということになる。低平・高平・上昇の推定とは異なり、下降のみは他の音調に比べて希薄な根拠のうえで論じられているわけである（下降拍が存在したことの予見は和語についてなされているのみである）。

3.3　他の研究者による『悉曇蔵』からの調値推定

さて、『悉曇蔵』に記される諸家の四声のうち、平声・入声にのみ軽重の区別を持つ六声家の「表（袁）」は、天台宗の漢音声明に現れる音調の別とよく一致することが知られており（頼惟勤 1951）、また六声体系は日本漢字音資料（漢音）では最も中心的であったことも多くの資料から知られるところである（沼本克明 1982:955 他）。この

意味では六声体系の音調を金田一以降の研究者がどのように推定してきたかをひととおり見ておくことが下降音調を考える上では必要と考えられるだろう。

天台宗の漢音声明を分析した頼惟勤 1951 では「戒品」の博士の分布から次のように調値が推定される[*46]。『悉曇蔵』「表（袁）」については、頼惟勤 1968 に基づいた。平声は「表則平聲直低有輕有重」とあるから、ほぼ平らな音調と推定しているようである。入声は「入聲徑止無内無外」とあり軽重は区別しないかのようだが、頼は「あるほうが自然と思われる」として一覧表では軽重を分けて調値を推定している。

	天台宗の漢音声明			『悉曇蔵』
	発端高度	高度変化	調値	「表」の調値
陰平	羽＞徵	強い下降	*53	*32
陽平	徵＞羽	下降性を帯びた平板	*21	*21
陰上	徵≒羽	平板と上昇の中間	*35	*34
陽上	去声に合流		*15	*15
去声	徵	強い上昇		
陰入	羽	やや下降性を帯びた平板	*54	*44
陽入	羽＞徵	やや上昇性を帯びた平板	*24	*22

表 10　頼惟勤による調値推定

悉曇学の立場からの分析である馬渕和夫 1962、『悉曇蔵』の用語を詳細に分析した遠藤光暁 1988、恐らくは現代官話諸方言の調値（平山久雄 1984）も参考にしたのではと思われる平山久雄 2002[*47]にそれぞれ掲げられる音調も表 11 に示す。このほか表には含めなかったが、金田一と同じ推定を行う平田眞一朗 2004・2005 がある。

	馬渕和夫	遠藤光暁	平山久雄
陰平	*22	*33	*31
陽平	*11	*11	*11
陰上	*55	*55	*55
去声	*15		*214

表 11　馬渕和夫・遠藤光暁・平山久雄による調値推定

*46 調値は実際には図示されており 5 段階表示法で示されているわけではないが「仮に発端高度を 3 段に分ければ」と記されていることを手がかりに、相互の高さを 5 段階表示に置き換えることは可能である。ここでは頼惟勤の調値を 3 段の基準とともに図示した沼本克明 1982:958 も手がかりとしながら 5 段階表示に置き換えた。

*47 平山のみが「表則平聲直低有輕有重」の記述から下降調を推定しているが、この「直低」から考えられる低平性は必ずしも純粋な低平のみを指すわけではないと考えていることが示されており、低平調の一種としての下降を意図していることが分かる。

以上の検討から、頼惟勤 1951 は平声軽を*53 のように発端高度を高く見積もっているのに対し、馬渕和夫 1962・遠藤光暁 1988・平山久雄 2002 はそれよりは低い発端高度を想定していることが分かる。このような発端高度が掲げられたのには、ひとつには同じ平声から声調分化したということを大きく損ねない範囲で推定したことがあるだろうと思われる。

3.4　方言間対応による字音下降調の検討

金田一春彦 1951 では漢音の四声に基づいて音調を推定するという手続きは取られなかったが、後に金田一春彦 1980、奥村三雄 1974 において漢音を由来とするものも含めた漢語アクセントの方言間対応が試みられている。そこでは和語をもとにした金田一の類別語彙の枠組みを漢語にも敷衍し、方言間対応の有無が論じられている。両論文において原音に存していた下降調をどのように処理しているかは、加藤大鶴 2008 に述べた。いまその要点を記せばつぎのとおりである。

1. 漢音陰平声の 1 字 1 拍語…和語 1 拍名詞第 2 類相当の対応が期待される。しかし奥村は同相当の漢語語彙は見られないとしている。金田一でも同様である。
2. 漢音陰平声の 1 字 2 拍語…和語 2 拍名詞第 2 類相当の対応が期待される。しかし奥村は「天（テン）」などを例示はするが語彙表には同相当の漢語を挙げていない（HL が基本形と峻別できないという方法論的な限界が背後にあると思われる）。金田一では一部に対応が見られると指摘するにとどめている。

和語 1 拍名詞第 1 類・第 3 類相当、同 2 拍名詞 1・3・4 類相当の漢語アクセントには諸方言間の対応が認められ、上記にのみ認められにくいという不均衡は、その音調実現そのものが和語のアクセント体系に受け入れがたい特徴を持っていたからではないかと考えられる。

3.5　外国借音による検討

この問題を解決する有効な手がかりのひとつは外国借音である日本漢字音に求められるだろう。ここでは日本漢字音の例として日本書紀歌謡の音仮名、朝鮮漢字音の例として中期朝鮮語の漢字音をそれぞれ挙げる。

3.5.1　日本書紀歌謡の音仮名

高山倫明 1982・2003 他では日本書紀歌謡における音仮名と原音声調の関係が論じられている。一連の研究によれば歌謡に現れる和語に想定されるアクセントと、歌謡を記した音仮名の字音声調には、平仄でいう平（平声）がおおむね低拍に、仄（上去声）がおおむね高拍にそれぞれ当てられる関係のあることが指摘される。もし陰平声

が高降りであれば、その音調的特徴は仄に近いと考えられるから高拍に当たっていることが期待されるが、そのような傾向は観察されていない。高山倫明 2012 では「陰調・陽調の発端高度を考えて、韻鏡の清・次清・濁・次濁の枠組みで細分化した表も作成した」が傾向は見いだせなかったとしており、むしろ詩文の世界で堅持されてきた平仄対立に基づく音調理解が強かったのではないかとしている。森博達 1991 他に示される、『日本書紀』α群の成立に関わった渡来系の人物が聴覚印象に基づいて中国原音を利用したと考えるほうが素直な理解とも思えるが、実際の四声の分布からはそのように理解する他ない。

陰陽が借字に関与するかという問題について森博達 1991:139-145 はややふみこんだ議論をしている。森によれば唐代長安音に生じていたと考えられる全濁上声の去声への合流は、α群においては可能性として認められるという（全濁上声字が選択されにくい傾向に基づいて）。また平声のうち全濁字が多く用いられているのは、それが低平調であったために低拍を表すのに適していたことが推測されている。ただし上声字については清濁の分布傾向を示すにとどまっており、平声字については日本書紀での用字が中国語原音そのものにおける清濁（音節頭子音）の分布率とどれくらいかけ離れているかを検討しなければ、それぞれ陰陽分化の反映と断定するのは難しい。

3.5.2　朝鮮漢字音

河野六郎 1968 の研究およびそれを多くの資料から発展させた伊藤智ゆき 1999・2007 では、中期朝鮮語（14・15 世紀）の漢字音が明らかにされている。

これらによれば、朝鮮漢字音は日本漢音と同様に、複層性を内部に持ちながらも概ね『慧琳音義』の体系に一致する、唐代長安音を母体音としているようである。当時の朝鮮語のアクセントは高低の対立からなる上り核アクセント体系を有していたと考えられ、音節に付与される音調には L、H、R（R は語頭にのみ現れる）があったという。こうした体系が受け入れた漢字音の種類と朝鮮漢字音の音調の関係は表 12 に示すとおりである（伊藤智ゆき 1999 をもとに作成、日本漢音の音調は金田一春彦 1951 を参照とのこと）。

調類	日本漢音	朝鮮漢字音
平声重 平声軽	低平調 下降調	L
上声 去声	高平調 上昇調	R(H)
入声重	低平調	断片的に L
入声軽	高平調	H

表 12　日本漢音・朝鮮漢字音の四声音調

この表で平声の軽重を区別しないことについて、伊藤は (1) 中国語において平声が陰陽に分かれる以前に伝わった、(2) 平声軽の下降調が「低下がり調」であったために平声重と区別されなかった、という 2 つの解釈をしている。(1) の場合は朝鮮漢字音

は日本漢音より早い段階で伝わったと考えることになるが、(2) の場合は必ずしもそうとは言えない、と結んでいる。

3.6　小倉肇 2014 による平声軽の音調推定

小倉肇 2014 では、呉音系字音の声調体系を漢音系字音とは異なるものとして推定している（表 13）。ここに見られる上声を高平ではなく下降と見るのは、日本本土祖語再建のために立てられた式音調（上野善道 1988）を採用してのものである[*48]。

小倉によれば和語の平声軽が上声に合流する（高平化する）のに対して漢音系字音の平声軽は平声に統合されることを勘案して、漢音系字音の平声軽は小幅な下降調（[42]-[31]）で実現したのではないかとする。この点、加藤大鶴 2008 でも和語と漢音系字音の平声軽が異なる振る舞いをすることに基づいて音調についてほぼ同じ推定をしているが、拙案では呉音系字音の平声軽を扱っていない。本稿でも述べたように呉音系字音の平声軽は上声と同様に「連音上」生まれたものであるから、原音との関係を論じる場合の声調体系は考慮しなかった[*49]。

《平声》	低降り調	［中低］	[21] の小幅な下降調
《東声》	下降調	［高低］	[51]-[41] の大幅な下降調
《上声》	下降式音調	［高中～高高］	[54]-[55]
《去声》	上昇調	［低高］	[15] の大幅な上昇調
《入声》	低降り調	［中低～低低］	[21]-[11]
《徳声》	下降式音調	［高中～高高］	[54]-[55]

表 13　小倉肇による呉音系字音の調値案

3.7　アクセントの体系変化前後の対応関係

以上の検討からすると、漢音の陰平声の元になった中国語原音の発音は、低降りだったのではないか、と推測されてくる。そのため低平調と区別されにくかったのではないか。しかしそうだったとしても、高降りで実現することは全く無かったのかというとそうでもない。

---

*48 式音調としての下降を字音声調体系の調値推定に導入したことを、それが意欲的な推定であると評価しながらも真に必要なことだったか検討の余地はあると見る立場もある（肥爪周二 2015 による書評）。金田一春彦 1951 以来の改定案となる意味でのインパクトは確かにあるが、諸方言における漢語アクセントにもとづいて平安末期の漢語音調を推定する際に、式音調がどのように役立つかは今後の研究に委ねられている。

*49 敢えて言えば漢語アクセントのレベルに写し取られた音調から「声調体系」を考えれば、小倉の見立ては措定し得ると考える。すなわちたとえばここに見る呉音系字音の大幅な下降調は、日本語アクセント体系における下降拍そのものかそれにかなり近い音調である、というような。

平安鎌倉期の字音声調を知るためには訓点資料などの漢文資料に付された声点を手がかりにすることがある。軽点のような微妙な位置の違いによって音調が示される場合は、それが誤写である場合や異なる差声体系間による書写の問題が関係する場合があるので、節博士のような別の手がかりがない限りはただちに調値を推測するには困難を伴う。そこで、平安鎌倉時代の字音声点から推定される漢語アクセントと、アクセントの体系変化後の漢語アクセントとの間に、和語に見られるような整合的な対応が見られるかどうかを調べることによって、体系変化前の実現調値を推定することができる（加藤大鶴 2015・2016）。

いま漢音系字音の 2 字からなる 4 拍漢語を例に取ると、体系変化前後では表 14 のような関係を取るものがある（群は加藤大鶴 2016 における分類）。

群	四声組合せ	体系変化前	体系変化後	語例
V	陰平＋陽平	HLLL	HLLL	丁寧
			HHHL	英雄
VI	陰平＋陰平	*HLHL	HLLL	春秋、星霜、朝恩など
			HHHL	心肝
IX	陽平＋陽平	LLLL	HHHL	神明、人倫、船頭など

表 14　2 字 4 拍の漢語　体系変化前後のアクセント

まず、IX 群が整合的な対応関係にあることが分かる。これは語頭隆起を生じて LLLL ＞ HHHL と変化したものと解釈される。ところが V 群と VI 群では 2 種類の対応関係が現れている。V 群の HLLL は 1 拍目のみが高いアクセント型が体系変化後も残ったもの、あるいは基本アクセントの現れと解釈できる。VI 群の*HLHL → HLLL は第 1 拍から第 2 拍にかけての下降を活かした HLLL とみなすことができる[*50]ならば V 群と同じ扱いができる。ところが両群ともに HLLL から変化したとは解釈しにくい HHHL で対応するものがある。これらは、LLLL ＞ HHHL の変化を経たと考えるのが自然な見方であろう。つまり体系前の実現調値として、陰平でありながら低平調で実現した、とみなしたほうが整合的に解釈される例も存在しているのである。

やはり低降りを母体音に想定したほうが良いのではないかとここでも考えられる。受容する日本語側には HL と LL しかないわけで、音節全体としての音調認識として低平調に近く受け取られる場合と、下降する調型を捉えて下降で実現することがあったとここでは解釈したい。

漢文資料の字音声点を分析した佐々木勇 2009:614-615 では、例えば『蒙求』諸本に

[*50] 中低形となるものにはアクセント型としてその形は取らなかったと考えるので*を付した。

ついての横断的な分析結果から 1 音節より 2 音節に多く平声軽点が観察される傾向が述べられる。しかし 2 音節に平声軽点が多く観察されるというこの傾向も、時代が降ると音節数に限らず平声に合流していくという。もしこの現象の背後に 2 音節を HL で捉えるような音調実現があったとするなら、HL ＞ LL になるような変化が生じたことになるが、これは考えにくい。字音の場合は原音への規範性が高いため、平声軽は平声の異音という意識が強く働くこと、そしてそのような規範意識や知識に支えられた平声軽と平声との区別が、その支えの衰退によって失われたということがまずもって考えられよう。平声軽が平声に表記上合流することがただちに音調上の変化を反映すると考えるべきではない。

そのように仮定することが許された上で、なお音調としてはどのように実現したのかを問われれば、平声軽と平声が異音の関係にあるという認識から大きく逸脱する音調はあまり自然とは考えにくいので、高降り調と低平調というペアで実現したとしても、伝承や学習に際して大きな労力を要したであろうことは想像に難くない。そうであれば、平声軽が低降りで実現したと想像することにもそう不具合はないと思われる。また、仮に平声軽が高降りとして実現することがあったとしても、それはすでに平声の異音という関係性から離れ、日本語アクセント体系の枠組みに接収された後のことであって、平声軽の音調を原音との関係で探ろうとする営みとは次元の異なる話であると思われる。

4　結論

以上、本稿では「日本四声古義」の再読と詳細な検討を行ったところ、その方法と結論は概ね現代においても有効であることが確認されたものの、以後半世紀を超える研究の進展から、特に字音四声の音調については部分的な書き換えが必要である可能性が見えてきた。表題にある「字音下降拍」は日本語アクセント体系のなかで実現されたものについては、和語に下降拍があれば同様に下降拍として実現したと考えて良いだろう。ただしそのように写し取られた（漢音の母体となった）中国語原音においては、低降りであっただろうと推定した。全体としてのその調値を低平拍に聞き取れば低平拍に実現し、下降という調型を聞き取れば下降拍に実現することもあったと考えるわけである。

本稿では「3. 『日本四声古義』の再検討」では平声の声調分化を中心に検討を加えたが、入声の問題など残る問題は多い。これについては稿を改めて考えたい。

（参考文献）

秋永一枝 1958「アクセント習得法則」（『明解日本語アクセント辞典』三省堂）
朝山信弥 1941「古代漢音における四声の軽重について」国語国文 11-11（『朝山信弥国

語学論集』和泉書院,1992 所収）
有坂秀世 1936「悉曇蔵所伝の四声について」音声学協会会報 41,（『国語音韻史の研究（増補新版）』三省堂,1957 所収）
伊藤智ゆき 1999「中期朝鮮語の漢字語アクセント体系」言語研究 116
伊藤智ゆき 2007『朝鮮漢字音研究』汲古書院
上野和昭 2011『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』早稲田大学出版部
上野和昭 2017「声明資料によるアクセント史研究―金田一春彦『四座講式の研究』について (1)―」論集 12
上野善道 1988「下降式アクセントの意味するもの」東京大学言語学論集'88
遠藤光暁 1988「『悉曇蔵』の中国語声調」（尾崎雄二郎・平田昌司編『漢語史の諸問題』京都大学人文科学研究所,『中国音韻学論集』白帝社,2001 所収）
奥村三雄 1974 「諸方言アクセント分派の時期―語アクセントの研究―」広島方言研究所紀要方言研究叢書 3
小倉肇 2014『続・日本呉音の研究―研究篇・資料篇・索引篇・外編』和泉書院
加藤大鶴 2008「字音平声軽音節の音調についての試案―和語下降拍からの検討」国文学研究 153
加藤大鶴 2016「アクセントの体系変化前後に見る漢語アクセントの対応―2 字 2 拍・2 字 4 拍の漢語を中心に―」論集 11
蒲原淑子 1989「漢語アクセントの一性格―『平家正節』を資料として―」活水日文 19
金田一春彦 1944「類聚名義抄和訓に施されたる声符に就て」（橋本博士還暦記念会編『国語学論集』所収, 岩波書店, 金田一春彦 2005b 所収）
金田一春彦 1951「日本四声古義」（寺川喜四男他編『国語アクセント論叢』所収, 法政大学出版局, 金田一春彦 2005b 所収）
金田一春彦 1949「古代に残存せる古代中国語四声のおもかげ」中国語学 31（金田一春彦 2005b 所収）
金田一春彦 1960「平声軽の声点について」国語学 41（, 金田一春彦 2005 所収）
金田一春彦 1964『四座講式の研究： 邦樂古曲の旋律による國語アクセント史の研究各論 (1)』三省堂（金田一春彦 2005a 所収
金田一春彦 1980「日本語のアクセントから中国唐時代の四声値を推定する」日語学習的研究 4-5（金田一春彦 2005b）
金田一春彦 1983「从日语声调拟测中国唐朝时代的四声调值」語言教学与研究 1983-7
金田一春彦 2005a『金田一春彦著作集第五巻』玉川大学出版部
金田一春彦 2005b『金田一春彦著作集第九巻』玉川大学出版部
黄淬伯 1931『慧琳一切経音義反切攷』中央研究院歴史語言研究所専刊 6
小西甚一 1948『文鏡秘府論考』大八洲出版

小松英雄 1957「和訓に施された平声軽の声点―平安末期京都方言における下降調音節の確認―」国語学 29（『日本声調史論考』風間書房,1971 所収）
佐々木勇 2009『平安鎌倉時代における日本漢音の研究　研究篇』汲古書院
高山倫明 1982「書紀歌謡音仮名と原音声調」文献探求 10（『日本語音韻史の研究』ひつじ研究叢書言語編 97, ひつじ書房,2012 所収）
高山倫明 2003「字音声調と日本語のアクセント」国語学 54-3（『日本語音韻史の研究』ひつじ研究叢書言語編 97, ひつじ書房,2012 所収）
中井幸比古 2002『京阪系アクセント辞典』勉誠出版
沼本克明 1982『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院
沼本克明 1986『日本漢字音の歴史』東京堂出版
肥爪周二 2015「小倉肇著『続・日本呉音の研究―研究篇・資料篇・索引篇・外編』」国語と国文学 92-8
平田眞一朗 2004『悉曇蔵』所伝の「金」の声調について」開篇 23
平田眞一朗 2005「『悉曇蔵』 所伝の四家の声調について」中国文学研究 31
平山久雄 1967「中古漢語の音韻」（牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編『中国文化叢書 1 言語』大修館書店）
平山久雄 1984「官話方言声調調値の系統分類―河北省方言を例として―」言語研究 86
平山久雄 2000「中古音概説」早稲田大学大学院講義資料
平山久雄 2002「安然《悉昙藏》里关于唐代声调的记载～调值问题」（『纪念王力先生百年诞辰学术论文集』商务印书馆）
馬渕和夫 1962『日本韻学史の研究 I』日本学術振興会
森博達 1991『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店
頼惟勤 1951「漢音の声明とその声調」言語研究 17-18（『中国音韻論集』汲古書院,1989 所収）
頼惟勤 1968「日本における漢字・漢文」（水田紀久・頼惟勤編『中国文化叢書 9 日本漢学』大修館書店）
頼惟勤・水谷誠 1996『中国古典を読むために』大修館書店

＊本稿をなすにあたって、東北大学国語研究室には資料閲覧のご高配をいただいた。記して感謝申し上げる。また本稿は「文献による日本語アクセント史研究の総括と展開」(2016～2018 年度科学研究費助成事業・基盤研究 C・代表鈴木豊) の一部である。

―東北文教大学短期大学部総合文化学科―